

ホセ・リサールの研究：改革者か革命家か？

中 里 彰

はじめに

フィリピンの英雄ホセ・リサル（Jose Rizal 1861-1896）はフィリピンの国父的存在である。彼は医者、小説家、学者、ヒューマニスト、詩人、言語学者と多才である。そのリサルについて、現在依然として改革者か革命家かという議論がフィリピンではなされている。フィリピンナショナリズムにおいては、これは重大な問題となる。なぜなら植民地時代の宗主国スペインに対する、フィリピン独立運動におけるリサールの役割が大きく変化するからである。役割のみならずフィリピンナショナリズムの性格付けもその点に大きく依存している。本論はリサールの目指したところは本当のところどこにあったかを動機理解的に探求する事である。

ところで、リサルのような英雄、多才な能力所有者、あるいは天才と言い換えても良いが、このような人物を理解する事は可能なのか。クレッチユマーによれば天才とは「価値を創り出す者」^(注1)とある。リサルは二つの、スペインの植民地であるフィリピン社会を批判する社会小説を著わし、それらによってフィリピン人の側には「フィリピン人」という民族意識を覚醒させ、つまり価値を創造し、植民地フィリピンにおけるスペイン人の側には、植民地を失うという恐怖の喪失予定感情を引き起こした。

この様な天才型の人間の理解は普通に可能かという問いに対しては、筆者は可能であるとみなしている。M. ウェーバーが次のように示している。

－「異常なもの」それ自体は理解による説明を拒むわけではない。それどころか正に平均よりはるかに卓越した人間のすることは、「整合型」に一致しているものとして完全に「理解可能なもの」であると同時に把握するのに「最も簡単なもの」でありうる。しばしば言われてきたように、「シーザーを理解するためにはシーザーである必要はない」。そうであればあらゆる歴史記述は無意味であろう。^(注2)

ウェーバーによれば、主観的に目的合理的に行われる行為と整合型の行為は意味を異にする。

－もし意味の点で理解できる行為が（研究者自身にとって）「妥当なもの」－我々は「整合型」と呼びたいのだが……^(注3)

にあるように整合型は第三者である研究者が妥当と考える点を行為者による主観的意味を持った目的合理的行為と区別している。

そして天才型の人間は目的合理的行為と整合合理的行為が一致する傾向が高いとみなしていると筆者は解釈する。その意味で、ウェーバーの言う卓越した人間の理解は「最も簡単なものでありうる」となる。

以上のような前提に基づき、リサールは改革者か革命家かという、フィリピンナショナリズムの原点を探る。まず始めは、リサールの幼い段階からの彼の人生の軌跡を見てゆく。そして「6. ホセ・リサールは改革者か革命家か」では、彼の個人的、私的生活の分野まで深く入り込み、リサールがどのような思想を抱くようになったのかを探る事によって、リサール像に迫る。最後に、裁判におけるリサールの行動を総合的に考察して結論を導きたい。

1. ゴンブルサ事件（三神父の名前から、Gomez, Burgos, Zamora⇒Gom-Bur-Za）

フィリピンはその植民地獲得の時から、キリスト教の布教が主たる目的の一つにされていた。そのため、スペインは若い僧侶、しかもイエズス会、アウグ

スティノ会やドミニコ会などの教団僧を送り込んだ。3世紀(1565-1898年)にわたるスペイン植民地支配の間にスペイン人とフィリピン人との間に生まれた混血(メスティーソ)、及びフィリピン現地人の子弟の中から次第に僧職を希望する者が出て来た。ここまでは社会的地位が高い僧を目指すという意味で当然と言えるが、次に示すように、この時取った教団僧の政策が以後のフィリピンナショナリズム発生の遠因になる。

通常、一般市民の居住地区に住みキリスト教徒を司牧する僧侶は世俗僧と呼ばれ、ローマ法王-大司教-司教という系列に属する。一方、教団僧はローマ法王-教団のみの関係である。フィリピンのキリスト教化は僧侶が不足していたため最初から教団僧を派遣した。本来教団僧は世俗僧ではないので、教区の市民を司牧する事はしないし、大司教の監督を受ける義務もない。そのためか、世俗僧が増えてきたにも拘らず、彼らは世俗僧に教区、特に裕福な地域の教区を譲り渡そうとはしなかった。世俗僧の数が増えるにつれ、即ちメスティーソと現地人の世俗僧が増えるにつれ、教区の世俗化(教区を教団僧から世俗僧へ移管)の要求が叫ばれるようになったのである。教団僧はすべて白人のスペイン人僧侶であり、世俗僧の多くはスペイン人との混血または現地人というコントラストがあり、この状況は次第に人種差別的様相を呈してきた。中でもここに出た名前の三人とも、特にブルゴス神父(1837年生まれ)は世俗化の運動のリーダーと見られていたのである。そういう状況の中、1872年1月20日「カヴィテの反乱」事件が起こった。これはカヴィテ兵器庫の労働者が従来から保持していた特権喪失(税金・強制労働の免除特権)が不満で引き起こした事件である。この事件をスペイン植民地政府は「陰謀・反乱」ということで三人の神父に無実の罪を着せて、彼らを軍法会議にかけた。三人の神父はここで死刑の判決を受けた。教団側の世俗化運動への抑圧である。1872年2月17日午前8時頃からバグバヤンの処刑場で三神父の刑が執行された。^(注4)

この時、リサルは1861年生まれなので10歳である。

この処刑執行において、総督イスキエルドは、僧職剥奪を要求したが、世俗

僧監督のトップに位置する大司教グレゴリオ・メリトンはそれをはねつけた。なぜなら、宗教裁判にも三人の神父はかけられたが、大司教も加わるこの法廷では無罪という判決が出ていたからである。^(注5)大司教はまた、三人が処刑された時点で彼らの魂の出発のためのレクイエムとして市中すべての教会の鐘を鳴らすよう命じた。ここにおいて、フィリピンのナショナリズムの発生(nascent nationalism)が見られたのである。

2. メルカド (Mercado) からリサル (Rizal)

リサルは11人兄弟の7番目で、姉5名、兄1名、妹4名の中で次男であった。この兄パシアーノ (1851-1930) はリサルより10歳年長である。この兄パシアーノは1872年、リサル (11歳の時) を、マニラのイエズス会の学校に入学させた。最初サン・ファン・デ・レトゥランカレッジに入学させるつもりであったが、途中で良い教師が揃っているイエズス会のアテネオ・ムニシパルに登録させようとした。しかし、教務課 (college registrar) は彼の入学を拒否した。そこを、マニエル・ゼスス・ブルゴス (神父ブルゴスの甥) の仲介で入学が許されたのである。^(注6)

ここで2点、注意すべき事がある。第一になぜブルゴス神父の甥が仲介役を引き受けたのかについてである。それはリサールの兄パシアーノがブルゴス神父からは大変に可愛がられていた学生であり、パシアーノにとっては師であり、友人であり、同居人でもあったからである。^(注7)この時点で、ブルゴス神父と深い関係にあるリサールの兄パシアーノは、すでにスペイン官憲に目を付けられていた。これを憂慮したパシアーノが、これまで用いて来たメルカド (Mercado) という姓を目立たないリサル (Rizal) 姓に変えさせたのである。こちらの方が安全だという配慮であった。それまではメルカド家の誰もリサルという名字を用いた事がなかったのである。ホセがマニラの学校に進学する事で初めて、もう一つの名字であるリサル姓を名乗ることになった。

第二の点は、なぜ二つの名字を持っているかについてである。すべてのフィリピン人は1849年にフィリピン総督の布告によって、その出身・身分に関わりなく名字を持つことになった。この時ホセ・リサールの父フランシスコは「メルカド」に加え「リサール」と言う新しい名字を与えられた。しかし、人々はその後も以前の名前を用いて呼び合っており、メルカド家の者たちも同様であったという事情があったのである。^(注8)

更にもう一点、ブルゴス神父との関連で述べる必要がある。後年になってホセ・リサールは外国に行き外国で様々な勉強、研究を行うが、それについても死刑台を前にしたブルゴス神父の遺言が影響を及ぼしている。その内容は後年のリサールの海外における行動の指針になっていると考えられる。遺言はホセの兄パシアーノを通じて伝えられた筈である。以下にその内容を記す。

「教育を受けなさい。できる限り我が国の学校を使いなさい。年長者から彼らの知っている事を学びなさい。その次に外国に行きなさい。

もし、あなたがうまくできなければ、スペインに行きなさい。しかし、できればより自由な国々で勉強しなさい。外国人がフィリピンについて書いたものを読みなさい。なぜならそれらの読み物は検閲されていないからです。外国の博物館に行き、古代のフィリピン人がどのようなものであったかをしっかり見なさい。常にフィリピン人でありなさい。しかし教育のあるフィリピン人でいなさい。これまで我々の中に思想家がいたが、彼らの思想は彼らと共に死んだ。これまで為されてきた、このような進歩は個人的なものであり、国に関わるものではなかったのです。あなた方も、あなた方の後続く人達に同じ事をしなさい。^(注9)

こうして、リサールは兄パシアーノを通じて、ブルゴス神父の悲運を知ると同時に、彼の思想を引き継ぎ、姓もメルカドからリサールになったのである。

3. ヨーロッパでのリサール

フィリピンのサント・トマス大学の後、リサールはヨーロッパへ更なる勉学の場を求めて旅立った。ヨーロッパでは彼は才能を花開かせ、多くの友人、ヨーロッパの学者との交流を深めた。中でもオーストリアの民族学者、ブルームトリットとの関係は兄とも慕う友情に発展するのである。1887年に小説『ノリ・メ・タンヘレ (Noli Me Tangere)』を著し、1891年9月18日にはベルギーのアントワープで第二の小説『エル・フィリブステリスモ (El Filibusterismo)』を発行し、スペイン統治下のフィリピンの悲惨な状況（特に教団僧の悪徳について）を全世界に公にしたのである。

リサールは幼い時から優れた言語能力を示しており、15歳の時に作ったスペイン語の詩をスペイン人神父に母親が見せた折、書物から写したものであると信用されなかった事、また大学生の時にコンクールに文章を出すと首席となり、スペイン人でないという事が判明するや、次席に落とされた事など、彼の言語に関する才能についての逸話は枚挙に遑がない。彼は15ヶ国の言語に造詣が深い。日本で言えば、まだ翻訳されていなかったフランスの人権宣言を明治24年にタガログ語に翻訳している。^(注10) また、マドリッド大学で受講した語学の授業の中で、例えばラテン語についてはクラスでトップであると教授が述べている。この時、級友の中には後に名をなす哲学者ウナ・ムーノがいた。彼はホセの二冊の小説をフィリピンに関する聖書であると指摘している。^(注11) またリサールがドイツ語や英語で書いた論文が出色の出来であったため、彼は両国から国籍の提供を受けている。ドイツに関しては二度も提供を受けた。^(注12)

リサールの豊かな才能はそれだけではない。彼は画家であり、彫刻家であり、そして医者、思想家、人類学者と言われている。リサールの名声が高まり彼の主張が反スペイン的、反白人的（＝フィリピンの）と解釈されるにつれ、彼への様々な批判攻撃が加えられるに至った。特に教団のそれは強かった。リサールに対する最初の小説への不満が高まったので、フィリピン総督がリサールの

『ノリ・メ・タンヘレ』を読んでみたところ、総督は逆に彼に敬服し、リサールに対し、命が狙われる可能性があるので国外退去を勧める有様であった。リサールに対する主な批判者、敵対者は宗教関係者であった。ただこの時の総督の友情はスペイン本国の政府がリベラルな性格故の一因と考えられる。リサールは再びヨーロッパに旅立った。

二冊目の小説『エル・フィリプステリスモ』をヨーロッパで著したリサールは、フィリピンに帰国する。覚悟の上の帰国であった。この時の総督はホセ・リサールを捕縛しようと躍起になっていた総督デスプホルであった。起訴出来ないような罪を捏造してリサールを逮捕し、乱暴にもサンチャゴ要塞に閉じ込めた。この要塞からリサールは総督に一通の書状を出した。「もし私が本当に反乱、扇動の罪があるなら裁判にかけて下さい。もし私が有罪なら、法で罰してください。－しかし、社会の自然な流れや活力の息の根をとめるような復讐はやめて下さい。－私が無実であるのなら、自由の身にして下さい」と訴えた。^(注13)この訴えは総督を激怒させ、リサールを永久追放の処分、即ちダピタン（ミンダナオ島北西部にある寂しい前哨基地）へと流刑処分にしたのである。

4. ダピタン時代 (1892-1896年)

この時期の事をリサールは「生ける屍のような生活」と述べている。^(注14)この時期の彼の人生は大きく五つの出来事によって特徴づけられる。(1) 監視下の生活であった事、(2) 家族と会えた事、(3) イエズス会の学校時代の恩師が来島した事、(4) 恋愛の機会はそれまであったが、フィリピンという祖国のために結婚を避けていたリサールに結婚相手ができた事、(5) 革命の首謀者ボニファシオが秘密結社カティプナンを結成し、彼の密使ヴァレンスエラが送り込まれてきた事。

特に(1)、(3)そして(5)はリサールの生死に多かれ少なかれ関係する事柄のため、少し説明を加えたい。

(1)の「監視下」にあるとは、ダピタンに流されたホセ・リサールは、カルニセロ大尉の世話（監視）を受けることになった。大尉との会話は常に総督に報告される事を予想しながらリサールは、自分が反感を持たれないように発言していた。リサールはダピタンの生活の感想として「かなりの自由を与えられ、家族のいない寂しさを除けば申し分ない」^(注15)とカルニセロ大尉に述べている。実際には単調で退屈、生ける屍のような生活と感じていたのであるが。^(注16)

カルニセロ大尉はホセに「一体、どんな改革がフィリピンになされるべきだと思うかね？」という問いに彼は次のように答えた。①フィリピンにスペイン議会代表権を与える。②教会を政府から分離させ、教会が現在行っている信託統治を終わらせる事、および欠員の生じた教区には、スペイン人、フィリピン人を問わず司祭を送ること。③初等教育の向上、修道会の干渉の排除、及び教師の半分はフィリピン人を採用すること。④公正に機能するよう各行政機関の改革。⑤人口1万6千人以上の州都に美術工芸学校を設立すること。⑥信仰の自由、言論の自由を認めること。」^(注17)と説明している。リサールとしては、かなり押さえた意見表明であるが総督を怒らせない範囲内で、しかも言うべき必要な内容を網羅していた。これは彼の対総督戦略であった。

(3)の内容はホセ・リサールがかつて学んだイエズス会運営のアテネオムニシパルの恩師がホセにカトリック信仰に帰依させようとして来島したのであった。リサールは宗教において頂点にあるものは理性と良心であると信じていた。彼はイエス・キリストが神であることを否定した。ホセ・リサールにとって人間イエス・キリストは神イエス・キリストよりも偉大であった。^(注18)

リサールと恩師サンチェス神父は師弟愛で結ばれていたが、リサールはサンチェス神父の忠告をきっぱりと断った。その後、別の神父が「リサールが書いてきたことをすべて撤回すれば、サント・トマス大学の教授職、10万ペソ、さらには農園も与える」と誘惑してきた。ホセ・リサールはこの申し出に怒り心頭、地団駄を踏む苦しみを味わった。^(注19)

(5)は(1)と(2)とは全く異なる内容である。(1)と(2)は植民地政府の側からの働きかけ、即ち攻撃であったが、(5)はフィリピン人の側からホセへの働きかけである。秘密結社カティプナン(国の御子たちの最高にして最も尊敬すべき結社の意)^(注20)を結成したボニファシオが、彼の密使ヴァレンスエラをダピタンによこした事である。リサルは眼科医であったため、スペイン当局に勘づかれないよう、ヴァレンスエラは目の治療を受けに行くという、ある盲目の老人の付添いとしてやって来た。^(注21)ヴァレンスエラはリサルを訪ね、一対一で膝を突き合わせて話をした。この訪問の真の狙いはカティプナンの活動の目的についてリサルに打ち明け、リサルの意見を求める事であった。リサルがカティプナンの組織の目指す理想に共鳴したので、ヴァレンスエラはたとえ武力が不十分であっても革命の狼煙(のろし)を上げる見込みであるという事実をリサルに伝えたのであった。ボニファシオは強い影響力を持つリサルの名前をどうしても必要としていた。ホセ・リサルのこともよく知らず、ホセの同意を得ていないにもかかわらず、リサルがカティプナンの後楯になっているかの如くに見せかけていた。^(注22)ヴァレンスエラはダピタンから脱出するよう強く勧めたが、けっして脱出ししないというスペイン当局への誓いをホセは優先した。結局ヴァレンスエラはリサルから革命承認を取りつけることができず、翌日マニラに戻っていったと言われている。^(注23)

5. 軍法裁判

1896年7月31日、リサルは総督ブランコから一通の書状を受け取った。それは革命荒れ狂うキューバにスペイン陸軍軍医として従軍の願いに対する許可状であった。^(注24)ホセは8月2日にダピタンからマニラに到着したが、スペイン行きの船は2日前に既に出航していた。そのため次の船まで1ヶ月月待たざるを得なかった。マニラでは反乱の噂が飛び交い、状況は危険になり始めて

いた。リサールは武装蜂起の計画には一切巻き込まれないよう用心をして、マニラ湾停泊のスペイン軍艦カスティラ号で一ヶ月を過ごしたのである。^(注25)

1896年8月30日、初の戦闘がマニラ郊外で開始された。そして、その年の10月6日バルセロナに到達したホセは逮捕され、マニラに送還のため、バルセロナを發ったのである。^(注26)リサールを逮捕へ導いた背景は以下の通りであった。

カティプナンによる反乱で、逮捕されたフィリピン人は4,000人にもものぼり、革命の志士たちはスペイン人によって次々と処刑された。逮捕によってフィリピン人は厳しい尋問のため白状させられたが、彼らの証言の中には必ず「ホセ・リサール」の名前が登場したのである。総督ブランコは、それまではリサールと反乱は一切関りなしと証言していたが、それを覆すような証拠が次々と露見したため、スペイン当局は遂にホセを見せしめにしようと決定したのであった。^(注27)ホセがフィリピンの地に一步でも足を踏み入れれば、殺されることは容易に察することができた。それゆえ多くの友人たちが、様々な方法でリサールを助け出そうと試みたが、リサールは心静かにマニラへと向かって行ったのである。^(注28)

今回の反乱で逮捕・投獄の容疑者の予審を担当したのはフランシスコ・オリベ大佐である。容疑者たちの多くが「ホセ」がこの反乱に関っていると証言したので、大佐はリサールに対し、そうした証言者たちとの関係について尋問をした。リサールは必要最小限の供述、及び他の者が不利にならないよう発言に慎重を期して答えた。^(注29)

リサールは軍事裁判にかけられる事が決定した。当時の軍事裁判では被告人には裁判に対する反対尋問は認められなかった。しかし、スペイン当局は、その処置を後に正当化するために形式だけを繕った裁判をやる必要があった。^(注30)この時点ではリサールは無罪放免になるだろうと考えていた。彼は証言ではっきりとカティプナンにも、武力によるスペイン政府打倒の企てにも、全く関りがないのであるからと述べた事に自信を持っていた。^(注31)カティプナ

ンの密使ヴァレンスエラはリサルに有利な証言—スペイン当局に対してボニファシオの密使として革命の支持を取り付けようとダピタンのホセを訪れたとき、ホセは真っ向からカティブナンのしようとしていることに断固反対し、ヴァレンスエラは空しくダピタンを去った—^(注32)をした。

しかし、ブランコ総督の革命に対する処置に対し、保守主義者からは強い不満が出ていた。一つは、何千人もの容疑者を逮捕・投獄したが、ブランコ総督は処刑、血の制裁を加えることには消極的であった。結局ブランコは12月13日解任され、彼の代わりに政府ナンバー2の実力者で、修道会との密接な繋がりをもつカミロ・ガルシア・ポラヴィエハが新しい総督の椅子に座り、この人事がリサールの運命を決定した。即ち、正当な裁判を受け、無罪となるリサールの希望は打ち砕かれたのである。当局は何としてでも彼に反乱の罪を着せようとしていた。^(注33)

12月26日土曜日、裁判がイントロムロスの一室（スペイン軍本部）で始まった。死刑が求刑され、スペイン当局は反乱の責任のすべてをリサルに負わせようとしていた。^(注34)

最後の場面で裁判長は「何か言いたいことは？」とリサルに尋ねた。

「次のような点を考慮して戴きたいのです。まず革命陰謀の容疑について。

私は、1892年の6月6日以来、今年の6月1日まで全く政治からは離れていました。ピオ・バレンスエラ氏から、革命が計画されていると聞かされたとき、私は反対し、何とかその計画を断念させるため、説得しようとしてしました。そのとき、明らかにバレンスエラ氏は私の言うことに納得した様子でマニラに戻っていきました。確かに彼は、反乱には加わりませんでした。しかし、スペイン当局に屈してしまったのです。

「私が今回の革命のリーダーであると、人は言っているようです。——しかし、配下の者たちから、計画していることを一切知らされず、脱走して欲しいときだけ、やって来るような、そんなリーダーとは一体何な

のでしょうか？その上、リーダーが『ノー』と言うのに、配下の者たちは『イエス』と言う、それが果たしてリーダーと言えるのでしょうか？^(注35)

この日の午前11時45分裁判は終了した。同日の午後、評決がなされ満場一致で死刑が決定した。翌、12月29日火曜日早朝、ドミンゲス裁判長はホセの前で死刑の判決を読みあげた。ホセは判決内容を告知されたことを証明する書類の最後に署名をした。12月30日、バグムバヤンで銃殺刑に処された。^(注36)

銃殺直前のリサールの態度があまりに落ち着き払い、平静であるため、訝しく思った軍医がリサールの手を取り脈を見たところ、全くの正常な脈拍であった事は有名な話である。

6. ホセ・リサールは改革者か革命家か

改革または革命指向の態度の起源はどこにあるか、また何を基準にするかについてまず考えたい。改革志向は、その社会を根底から変える事を望まないが社会を漸進的に理想に基づき改良してゆくものとすれば、この時点で特に重要なことは、その社会に対し少なくとも忠誠心を保持できる経験をする必要がある。これに対し革命指向の場合は社会への同化よりは否定、また忠誠心も望まない且つ社会を根本的に変えたいと言う経験を蓄積していると考えられる。幸いにも、本論文の史料はキリノ著「暁に紅を」に主として負うているが、その理由は本書が確かな驚くべき事実に基づいて緻密にリサールを描いているからである。本書の内容からこれらの事実を丁寧に拾い上げて整理してゆくことによって、おおよその改革者及び革命家としてのリサール像、更には二者のどちらに重きが置かれているかが浮かび上がってくる。

(1) 改革者としてのリサル

まず改革者としてのホセ・リサル像から見る。ホセ・リサルは地主階級で豊かな生活を送る恵まれた家庭に生まれた。母親はスペイン語が堪能であり、彼女の父親はスペイン議会に出席するフィリピン代表議員の一人であった。しかもホセの母親の弟は留学経験者でスペイン語に加えドイツ語、英語、フランス語を話した。^(注37)

マニラのアテネオムニシパル（中等学校）はイエズス会の学校であったが、この学校を首席で卒業している。アテネオでは恩師のサンチェス神父に可愛がられた。この後サント・トマス大学へ進学する。しかしサント・トマス大学は好きにならなかった。友人達から外国では自由に学問ができるという便りをもらい、留学を目指す。兄パシアーノの承認のみでスペインに留学した。^(注38)

スペインで知己を得たのがパブロ・オルティガ・イ・レイであった。彼パブロはマニラの寛大な総督デ・ラ・トルレの参事官であった。パブロとの交際は楽しいものであった。パブロは、ホセが憧れていたスペインのブルジョアジーの典型で修道会の強力な擁護者ではあったが、ホセとパブロはあらゆることに関して議論をした。生涯のよき友であった。^(注39)

マドリッド到着の数年後、ドイツからリサルは次のように書き送っている。「マドリッドでいちばん素晴らしいのはブルジョアジーの人々だ。彼らは優秀で、教養があり、気品もあるが、親しみやすく親切で、物事をわきまえている」^(注40)この時点ではホセはブルジョアジー絶賛の態度を表明しているが、この考え方はその後のリサルの考え方にかかなり影響を及ぼしているとみて良い。彼は論文「フィリピン人の怠惰について」の中で、政治改革が民衆の側から起こることは危険で致命的であるが、上層階級から起こる改革は平和的で実り多い結果を生み出すと述べている。^(注41)

そして、本論文「4. ダピタン時代」でみたカルニセロ大尉に述べた改革案の第一にあったようにスペイン議会代表権をフィリピンに与えることがリサルの改革論の中核を成すと考えられる。なぜなら独立を望まず、スペイン

の植民地にとどまる事を意味するからである。以上からホセ・リサールの改革志向の像は次のように要約される。ブルジョアジーのスペイン人から承認される事に基づき、ブルジョアジーの素晴らしさ及び彼らの社会を是認している。そして、スペイン議会にフィリピンの代表者が認められ、そこを基点にしてフィリピン社会を改革してゆこうとする考え方を持つ行動論者であると言える。

(2) 革命家リサール

革命家を指向するようになるためには、通常その社会によって承認されないような経験、または自己の生命が脅かされるような経験の蓄積があるのではないか。まず彼の家族から見てゆく事にする。

① ホセと家族の体験

1871年から2年半、無実の罪でリサールの母は自宅から30km離れた刑務所に投獄された。母親は刑務所まで歩かされている。リサールの妹、当時4歳のソレダが修道会の大広間で、地方視察に来ていた総督イスキエルドの前で踊りを披露する機会があった。彼女の愛らしさに魅了された総督は、ソレダの願いを聞いてやろうという。このソレダの願い、つまり「母を助けて下さい」は総督に受け容れられ、直ちに釈放されたのである。これは少年ホセ・リサールにとって苦い体験であった。^(注42)

次にリサールの兄パシアーノの事件。当時マニラのサンホセ大学の学生であった兄パシアーノはブルゴス神父（ゴンブルサ事件のリーダー）の活動援助のため基金を集めていた。後にブルゴス神父の不当な処刑を非難した。しかし、これが元で兄パシアーノは修道会によって試験を受験できないようにさせられ、大学を退学せざるを得なくなった。^(注43) また、兄パシアーノの事件によって、メルカドの名字は反逆者と見なされ始めていた。ホセは11歳になり、そろそろマニラの学校で教育を受ける年齢に達していた。既に述べたようにメルカドの名字ではまずいという事で、ここで初めてホセ・メルカドはホセ・リサールの名字でマニラに出たのである。^(注44)

マニラのイエズス会の学校であるアテネオ・ムニシバルを首席で卒業したホセはドミニコ会経営のサント・トマス大学に入学したが、学内の雰囲気はアテネオ・ムニシバルと全く異なっていた。彼は古臭いその教育方法に傷ついた。^(注45)このマニラでの学校生活を始めて以来、リサルはフィリピン人とスペイン人の比較をするようになった。彼の結論はフィリピン人はスペイン人よりも優れていると。なぜなら、フィリピン人はスペイン語という言葉の壁を乗り越えなければならないにも関わらず、スペイン人よりも成績が良かったからである。フィリピン人がスペイン人を尊敬するのはフィリピン人が生まれつき劣っているのではなく、恐れと身を護るためからであると考えた。ホセの心の中に次第に愛国心が芽生え始めたのである。^(注46)

リサルが19歳の夏休みにカランバの実家に帰っていた時の事である。ある晩、家から出た時にぼんやり人影が見えたが、それが憲兵であると気づかず彼は帽子を取らなかった。それだけの理由で彼は鞭で打たれ、逮捕された。さらにフィリピンからの追放という脅しを受け、漸く釈放された。背中への傷は何週間も痛んだという。^(注47)

リサルのナショナリズムは次第に彼の心の中で成長し、サント・トマス大学在学中にスペイン人学生と争いになる事もあった。ある時リサルはドミニコ会教師によるクラスメートへの虐待に我慢できず、公然と立ち上がり抗議をした。その時教師は彼の大胆不敵な行動を許さず、ホセを進級させないと言い切ったのである。^(注48)

以上の内容から、ホセの母親、兄バシアーノ、ホセの少なくとも家族の中の三人は痛みをともなう個人的な体験（＝スペインを否定する）をしていると要約できる。

② ヨーロッパ体験とホセの思想の深化

サント・トマス大学での事件を契機に、ホセ・リサルはヨーロッパ留学を決心するのであった。もちろん友人の、ヨーロッパでは自由に学問ができるという知らせに影響を受けていた。1882年ホセは両親の心配に基づく返事を予

想して許可を得ないまま、ヨーロッパに旅立った。スペインのマドリッド中央大学に入学。この時期、彼は次第にマドリッドに適応し、生活を楽しむ事ができるようになっていた。しかし、この同じ年の12月30日、彼は恐ろしい悪夢を見ている。夢の中で彼は劇中で死ぬ俳優になっていた。奇しくも14年後の同じ日リサールのこの悪夢は現実のものとなる。ホセは無意識のうちに自分の目指すところの運命を予知していたのかもしれない。^(注49)彼の母親は「時として学問は身の破滅を招くことになる」と常にホセの事を心配をしていた。^(注50)

ヨーロッパ社会にも十分慣れたリサールは1887年26歳の誕生日にジュネーヴから敬愛するブルーメントリット博士に次のような手紙を送っている。^(注51)

私には、いかなる反乱にも関わる意志はないのです。まだ、機は熟してはおらず、危険すぎます。しかし、政府がこれ以上、弾圧を続け、人民を苦しめ、人々もそのような状況で生き長らえるよりも命をかけて戦うしか他に道がないと思った時、その時が来たなら、私も立ち上がるでしょう。戦いか、平和的話し合いか——。どちらを選ぶかは、スペインにかかっているのです。ご存知のように、我々フィリピン人は、我慢強く、大人しく、従順な国民だからです。しかし、それももう、限界にきているのです。私がどれほど祖国の発展を願っているかよくわかりだと思えます。スペイン政府に非があると信じる限り、私はスペインに立ち向かい、戦います。

ホセは日常生活では、潔白で正直な人間であり、スパルタ人のように厳しく自分を律していた。^(注52)

フィリピンの教会を守るべき司祭たちは、初期においては博愛的精神を持ち、統治者の不正から哀れな信者たちを守ることに尽くした。しかし、時が立つにつれ、フィリピンのスペイン人司祭たちの質が低下した。その一因をリサールは彼らが下層階級出身だったからと推測している。^(注53)スペイン自由主義者た

ちにリサールは望みを託していたが、彼らは政権を離れている時は理解を示してくれるが、政権の座につくと政局運営のため、フィリピンのことにかまっていられなくなると不満を感じていた。^(注54)

このような状況を打破するために、慎重すぎるフィリピン人に本当は植民地から脱して自立できる国であることを気づかせたいと彼は考えていた。これを思いとどまらせることが出来るのは彼の両親のみであった。^(注55)この頃或る友人(画家ルナ)が社会主義思想についてリサールに問う事があった。ホセは苦笑するだけで、「ヨーロッパは外部からの支配を受けてないので、このような理論はヨーロッパにおいてのみ通用する。フィリピンには階級闘争というものとは存在しない。国内における問題の解決はスペインの支配者たちの追放か、あるいは行政を牛耳る修道会を打倒するしかない」と答えている。^(注56)小説『エル・フィリプステリスモ』を執筆している頃、ホセは或る友人に「僕は彼らに世の中を混乱させ、成功の見込みのない革命なんて絶対に扇動はしないよ。良心にかけても軽率で無益な流血は避けたいんだ。でも、フィリピンを革命に導こうとする者は必ず僕を必要とする」と勇ましい発言というか、予言をしていた。^(注57)また、彼は処刑を待つサンチャゴの幽閉牢の中にいる際に「スペイン人の指導者たちの言葉が私を反逆者にし、独立を叫ばせたのだ。マドリッドにいたとき共和主義者たちは、自由は銃弾をもって手に入れるのであり、決してひざまずいて請うものではないと、私に教えてくれた」と述べている。^(注58)

次に彼がヨーロッパの幾つかの地を訪問しているが、それについて見てゆきたい。1886年、ハイデルベルク大学を訪問後、ホセはコブレンツに到着。ここにはクルップ製鋼所があり、鋤、鍬などの農機具のほか大砲も製造していた。

1890年ベルギーのブリュッセルで生活をしていた時期、ホセはフェンシングと射撃の練習を行い、射撃の腕前はかなりのものであった。^(注59)また、ベルギーという国そのものがかつてのスペインの植民地から独立した国であったので、フィリピンの将来に取り組むリサールにとっては勇気を与えられる国でもあった。

リサールがライプチヒを訪れた時、2人のプロシア兵と会話をする事があったが、彼は徹底して無駄なく統制されたドイツ軍を高く評価していたので、会話を楽しんだようである。^(注60)

以上、ヨーロッパにおけるリサールの変化を観察してきたが、敬愛するブルームントリット博士に「一スペイン政府に非があると信じる限り、私はスペインに立ち向かい戦います」と26歳の誕生日に宣言している。さらにマドリードの共和主義者たちから学んだのは「自由は銃弾をもって手に入れるのであり、決してひざまずいて請うものではない」という言葉である。ホセ・リサールはスペインの植民地から独立したベルギーに対しては、勇気を与えてくれる国という事で仰ぎ見ていたのである。ヨーロッパではフェンシング、射撃の訓練をし、大砲を造る製鋼所の町も訪問した。また、統制されたドイツ軍を高く評価していたことを考えれば、彼が独立を真剣に考えて、その考えを強固なものにしていた事が理解できよう。ホセは「かつて、ヴァレンスエラに私が日本を訪れた時、日本人の閣僚の一人がフィリピンに武器を輸送するために商船3隻を提供してくれると言ってくれたことがあったんだ。そこで、私はマニラの金持ちのフィリピン人に武器や軍需品を購入するための資金として、20万ペソ立ててくれるよう、手紙を依頼したんだが結局断られた。」と述べている。^(注61)

おわりに

先述したように今日のフィリピンでは依然としてリサールは問題とされている。その問題の本質とは裁判の時のリサールとヴァレンスエラの証言及び発言内容をどのように解釈するかである。著名な思想家コンスタンティーノは証言内容を真なるものと受け止めている。この解釈の方向に沿ってギリェゴは次のように述べている。「その熱烈な言葉と思想を通して、虐げられた大衆にスペインの束縛から自らを救うよう鼓吹したが、リサール自身はその階級的出自に従順であり続けた。彼は自らのブルジョア的遺産を否定した上で、抑圧された

農民たちとの間の高まる境界を超えることができなかった」。

革命後、生き残ったカティプナンの密使ヴァレンスエラ博士はリサールを回想して「自分（＝リサール）が軍医に志願した目的は実践的に戦争を学ぶことであり、もしフィリピンの窮境を改善する方法を見つけようと思うなら、キューバの軍隊を経験することである」と述べた。^(注62)

1914年のヴァレンスエラ博士の回想によれば、リサールがカティプナンへ与えた革命に関する三つの助言を与えたと言う。

- (1) 蜂起する前に必要な武器・弾薬、そして裕福なフィリピン人たちの協力を確保すること。
- (2) もしカティプナンが発覚したら、逃げるより戦う方が良いこと。
- (3) もし裕福なフィリピン人たちがカティプナンへの支援を拒んだら彼らを中立化させるべきこと。

以上の3点を助言したが、第(2)点についてはカティプナンのリーダーである、カルロス・ボニファシオを含めてカティプナンの大多数が賛同したのであった。^(注63)

裁判の中での発言内容について、カルロス・キリノは強迫のもとで行われたものは、そのまま信頼することはできない。特にリサール博士とカティプナン会員たちに関する部分はあてにならないと分析している。革命家のリサール像とヴァレンスエラ博士の回想の内容は符号すると思われる。

以上探求してきた事から言えることは特にリサールの人生を見た後即ち、彼の家族、彼の学校時代、ヨーロッパでの思想の練磨、そしてヴァレンスエラ博士の20世紀に入ってから発言を考慮すればリサールは「階級の境界を超えていた」革命家と言える。

注

- (1) E・クレッチュマー 内村祐之訳『天才の心理学』岩波書店
昭和40年1月20日 第6刷 p. 6
- (2) M. ウェーバー 林道義訳『理解社会学のカテゴリー』岩波書店
昭和44年10月20日 第3刷 p. 14
- (3) 同上書 p. 23
- (4) G. F. Zaide & S. M. Zaide. Rizal and Other Great Filipinos, 1988, pp.114-119.
- (5) Ibid., p.120.
- (6) Ibid., pp.27-28.
- (7) Ibid., p.24.
- (8) カルロス・キリノ 駐文館訳『暁よ紅に』駐文館 平成2年10月10日 p. 10
- (9) G. F. Zaide & S. M. Zaide. op. cit., p.119.
- (10) 安井祐一『ホセ・リサールの生涯』芸林書房 1992年 p. 19
- (11) カルロス・キリノ前掲書 p. 2
- (12) 安井祐一前掲書 p. 27
- (13) カルロス・キリノ前掲書 p. 315
- (14) 同上書 p. 348
- (15) 同上書 p. 315
- (16) 同上書 p. 348
- (17) 同上書 pp. 319-320
- (18) 同上書 pp. 331-332
- (19) 同上書 p. 332
- (20) 同上書 p. 367
- (21) 同上書 p. 368
- (22) 同上書 p. 368
- (23) 同上書 pp. 366-370
- (24) 同上書 p. 371
- (25) 同上書 p. 372
- (26) 同上書 p. 380
- (27) 同上書 p. 378
- (28) 同上書 p. 380
- (29) 同上書 p. 362
- (30) 同上書 p. 385

- (31) 同上書 p. 385
- (32) 同上書 p. 386
- (33) 同上書 p. 386
- (34) 同上書 p. 390
- (35) 同上書 p. 391
- (36) 同上書 pp. 393-394
- (37) 同上書 p. 29
- (38) 同上書 p. 42
- (39) 同上書 p. 78
- (40) 同上書 p. 70
- (41) 同上書 p. 256
- (42) 同上書 p. 20
- (43) 同上書 p. 22
- (44) 同上書 p. 22
- (45) 同上書 p. 35
- (46) 同上書 p. 36
- (47) 同上書 pp. 39-40
- (48) 同上書 p. 42
- (49) 同上書 p. 76
- (50) 同上書 p. 100
- (51) 同上書 p. 136
- (52) 同上書 p. 264
- (53) 同上書 p. 94
- (54) 同上書 p. 242
- (55) 同上書 p. 243
- (56) 同上書 p. 273
- (57) 同上書 p. 272
- (58) 同上書 p. 254
- (59) 同上書 p. 234
- (60) 同上書 p. 116
- (61) 同上書 p. 369
- (62) R. イレート, V. L. ラファエル, F. C. ギブイエン 『フィリピン』 めこん 2004
年8月21日 pp. 256-258
- (63) 同上書 pp. 263-264

A Study on Jose Rizal: Social Reformer or Revolutionist?

Akira Nakazato

The Philippine national hero, Jose Rizal, born and died in late 19th century, authored two famous novels which aroused nationalism in the Philippines. He was the first Filipino who expressed national aspiration, leading to the outburst of independence movements or revolution.

However, some say that Rizal is a mere social reformer, and others call him revolutionist. Nobody in the Philippines today can ignore the great role of Rizal in the history of Philippine nationalism.

The purpose of this paper is to focus on the life history of Rizal in search of giving a true answer to those aforementioned claims or questions. After the scrutiny of obtained important facts from Rizal's life history, classifying them into two categories – social reformer and revolutionist, the correct answer seems to be a 'revolutionist'. Additionally, the critical statement what Rizal had made was attested by Pio Valenzuela of a secret messenger from the secret society 'Katipunan' later in 20th century, also strengthened the image of Rizal as a revolutionist.

To carry out this research, writer here used a book entitled 'The Great Malayan: The Biography of Rizal' by Carlos Quirino, which was most helpful in terms of fact-finding.